

特集2

インフォデミック*としてのコロナ狂想曲

矢吹 晋

(21世紀中国総研ディレクター)

*パンデミック(感染爆発)ということばを知らない人はいない。人々はいま自分がいつコロナウイルスに感染するかと戦々恐々だ。だが、この「ウイルスの致死率」は、流感並みにすぎないのだ。この統計的事実に基づいて判断すると、現在の事態は明らかに情報公害によって人々が自縄自縛になっている姿と見てよい。Information (情報) +Epidemic (伝染病)という二つの語彙から Infodemic (インフォデミック) という新語が作られたのは今春である。ペストやスペイン風邪など歴史上さまざまな感染症と人類はつきあってきたが、その度に人々は、現実の細菌とともに、それに関わるウワサ、風聞、すなわち細菌情報によりいっそうの恐怖を感じさせられてきた。コロナウイルスにはまだ正体不明の特徴がある。それらの特徴が SNS を通じてまたたく間に全世界に流布した。その速度はウイルスの伝播速度を上回った。WHO がパンデミックを宣言したのは、3月11日だが、これに先立つ約1カ月、アウトブレイクが中国からヨーロッパに広がる過程で、世界は空前の SNS 情報に溢れた。それらの情報

のなかには正しいものも少なくないのは当然だが、より耳目を驚かせたのは、針小棒大の虚偽情報、フェイクニュースである。この現象に警告するために、世界の感染症専門家たちが情報公害に迷わされるな、**Infodemic**（インフォデミック）に警戒せよと呼びかけた。日本では折からの反中ムードの大合唱のなかで、世界でも最も、甚だしいインフォデミックが蔓延したことは、以下に述べる通りである。

（1）「ウイルスへの恐怖感」と「中国への恐怖感」

新型コロナウイルスの発生源をめぐる米中間の「責任追及・謝罪要求」舌戦は、衰えることなくますます激しくなっている。これは多分、2020年11月3日に予定されているトランプ再選の投票日当日まで続くものと見られる。というのは、この言論・宣伝戦は、そもそもトランプ政権と米国情報筋が仕組んだものである。トランプは選挙民のナショナリズム感情を煽り、投票獲得の目的で始めたものだから、再選を達成目標に掲げている。

しかしながら、米国情報筋の目的は、トランプの目的とは、重なりながらずれる。彼らの目的は「勃興する中国」の国際的影響力を減殺し、「パクスアメリカナの永続」を狙う。この文脈でやや中期・長期的だ。秋の大統領選挙以後も射程に収めている。

その食い違いはさておき、米国支配層、トランプから見ると、新型コロナウイルスというパンデミックは、武漢市、なかでも市内の海鮮市場から蔓延したことは明らかであり、それは中国科学院武漢ウイルス研究所がまき散らしたものだ。ただし、より具体的に見ると、①故意に撒き散らした説と、②不注意によりウイルスを漏洩させた、③中国軍が生物兵器戦の実験を試みた、以上3説がある。

これに対して、中国側の言い分は、2019年10月に武漢で開かれた「史上最大規模の世界軍人運動会」という得難い機会を奇貨として、米国は中国つぶしの陰謀を画策した。その陰謀とは、①米軍選手団を生物兵器作戦チームの隠れ蓑として活用する謀略論、②前者ほどの計画性はないが、偶然大会の数カ月前のフォート・デトリック生物化学基地の漏洩事故によるウイルス保菌者が選手団に加わった結果、「選手団の間で意図せざる感染」が発生して、競技の結果に影響したと見る事故論、これら二つに分けられる。いずれにせよ、「もともと中国には存在しなかったウイルス」が「米軍選手団(の一部)によって持ち込まれた」という疑惑になる。

ここで日本から見て極めて重要な事実がある。それは10月18～27日に開かれた「史上最大規模の世界軍人運動会」に「日本の自衛隊が参加していない」事実である。「参加の有無」を筆者が重視するのは、不参加のため、日本では武漢で10月にこのようなスポーツ大会が開かれた「事実」そのものを知らないのだ。日本人の誰もが知らないスポーツイベントは、無視してよい。無視とは本来は存在を知りながら無視するものだが、これが転じて「軍人五輪そのものが存在しないか」のように、日本人の認識は変化している。「誰もが知らないものは、日本では存在しないことにする」。このような空気が日本を覆い、軍人五輪はそもそも存在せず、代わりに東京五輪の話は、極度に大きな話題とされ、そのためには福島原発事故の放射能漏れも、国家財政の赤字問題もすべて隠蔽される。

ここから分かるように、日本人の状況認識は、「武漢五輪報道の欠如、東京五輪への過度の期待」という二重の意味で、国際的常識から乖離している。その結果、中国側が何を根拠に「米軍の持ち込み説」を主張しているのか、その背景がまるで分からない。逆に、これは結果論だが、未知のウィルスのたとえようなない恐怖感は執拗なまでに煽られているので、「ウィルスへの恐怖感」が「中国への恐怖感」にすり替えられる。知識の空白につけこむ陰謀論者の作戦は実に巧みであり、その結果、日本ではいま、空前の「中国嫌い」病が蔓延している。曰く、「中国はとんでもない国だ」「世界覇権を得る為に、手段を選ばない。武漢ウィルス拡散のような悪質な手段さえ厭わない」。

(2) 武漢軍人五輪で米選手が「原因不明輸入性マラリア」

認識の空白を埋めるために、武漢の軍人五輪がどのようなものかを、2019年10月18日発のチャイナネットからコピーしておく。

……この大会には、109カ国の軍人9308人が参加する予定だ。大会の規模は過去最大で、種目数も過去最多である。この第7回世界軍人運動会は10月18日、湖北省武漢市で開幕した。世界のメディアは、「100カ国以上の1万人弱の軍人が中国中部の武漢に集まり、軍の榮譽と世界平和をアピールする軍人五輪は、スポーツの魅力により、武漢は世界の注目の的になろう」と報じた。すなわち、世界軍人運動会は国際軍事体育理事会（CISM）が主催する、世界の軍人にとって最も格式の高い大型総合性運動会であり、4年毎に開催されている。[前回は韓国の聞慶市で2015年に開かれた。自衛隊はこれにも参加しておらず、報道は皆無である（矢吹）]。

中国での開催は昨年10月が初めてであり、中国国防部は開会前日の記者会見で、大会情報を次のように発信した。

「これは中華人民共和国成立70周年に中国が開催する重要な国際的総合体育行事だ。中国政府と中国人民が大国の責任を果たし、軍事スポーツ交流を推進し、世界の平和と発展を促進する積極的な実践だ。50数カ国の国防部長、軍代表者、

表1 2019年武漢軍人オリンピック獲得メダル数

	国	金	銀	銅	合計
1	中国	133	64	42	239
2	ロシア	51	53	57	161
3	ブラジル	21	31	36	88
4	フランス	13	20	24	57
5	ポーランド	11	15	34	60
⋮					
35	アメリカ	0	3	5	8

(出所) 矢吹晋『コロナ後の世界は中国一強か』花伝社、2020.7

各国駐中国武官などが開幕式に出席する」。関係責任者が10月17日に発表した情報によると、今年は「史上最多の27競技・329種目」が行われる。

各国は錚々たる顔ぶれを派遣した。今年の選手の中には五輪や世界大会で優勝した67人が含まれる。リオ五輪トップ8は118人、近代五種競技世界トップ10は8人、前大会の軍事特色5競技の覇者は43人。これが世界の軍人の五輪であり、激しい競争が展開されることが分かる。中国軍は553人という史上最大規模の代表チームを作った。選手406人が健闘する。報道によると、ロシア代表は過去6回のうち5回で金メダル数トップになっている。今年は多くの世界的に有名な選手からなる強豪チームを派遣した。ブラジル代表も輝かしい戦績を手にしており、第5回大会では金メダル数でトップになった。ブラジルは今年、中国に次ぐ規模の代表団を派遣した。またフランス、ドイツ、米国、韓国も強豪だ。

10日間の競技の成果は、メダル獲得数が教えてくれる。

表1から分かるように、米国は成績が振るわなかった。金メダルはゼロ、銀メダルは3個、銅メダルは5、都合8個のメダルしか獲得していない。選手団の数は他国と同じ規模なのに、メダル数はロシア、ブラジル・フランス等と比較してあまりにも少ない。何があったのか。選手団のうち5名が「原因不明の輸入性マラリア」に罹患して診察を受けた。うち2名は感染症専門病院金銀潭医院に入院した。図1の写真は黒人選手の退院に際して花輪を送り祝賀する病院スタッフのヒトコマだ。

診察を受けて入院するほどに重症化したのは、選手の中で2人だけであったが、この「原因不明の感染症」が屈強な選手団の間で広まっていたために成績不振がもたらされたと中国側は疑っている。

(3) 「世界1号」患者は米生物化学部隊警備員

香港の英字紙『SCMP サウスチャイナモーニングポスト』(2020年3月13日付)によると、中国における新型コロナウイルスによる肺炎の1号患者は、

図1 黒人選手の退院に際して花輪を送り祝賀する金銀潭医院病院スタッフ



(出所)「四名特殊患者“暴露”一支特殊軍運會保障力量」『財經頭條』2020年02月24日
00:00 cmb-china <https://cj.sina.com.cn/articles/view/1444182881/56147b61019001xa4>

2019年11月17日に発見された「50代の湖北省居民」である。これまでは「2019年12月1日に発病し、8日に報告された」と伝えられてきたが、それよりも2週間早いことが事後に確認されたと、SCMPは中国側の未公表資料をもとに報じている。これは中国国内の話だ。

3月24日、「世界1号」患者とされる人物の名前が中国の「搜狐」というサイトに掲載された。これによると、世界1号患者の名は、武漢の軍人オリンピックに出場したアメリカ人選手、マアチャ・ベナッシ (Maatja Benassi) である。

彼女はフォート・ベルボア基地諜報軍所属の武装警備員、すなわち生物化学部隊 (BC) 基地の警備を担当する諜報軍兵士の一人だ。マアチャ・ベナッシは武漢軍人オリンピックの女子ロードサイクリングの参加選手であり、米国が専用機で武漢から帰国させた「5名の米軍選手」の一人とされる。

マアチャ・ベナッシの夫、マアット・ベナッシも軍のサイクリストとして働く。夫には双子の兄弟、マイケル・ノートルダムとベニー・ベナッシがいて、ベニーはオランダの初の新型コロナウイルス感染者=第1号患者であり、発病前にイタリアで最も感染の重大なバロディ地区を旅している、と報じられた。

金燦榮 (中国人民大学教授) も、自身の YouTube で、4名のバージニア州人 (米国人3名とカナダ人1名) が「世界1号患者」である事実を発見したと語った。ベナッシを1号患者と特定する背景には、以下の米国側事件がある。

①米国で2019年7月メリーランド州のフォート・デトリック生物化学部隊基地が閉鎖された。『ニューヨーク・タイムズ』(8月5日)はその理由を「実験室の排水浄化が不完全なため」と書いた。だが、人々はこの解説を疑った。というのは、

図2 アメリカ人ロードサイクルの選手、マアチャ・ベナッシ(左端)



(写真出所) U.S.Department of Defense, Armed Forces Sports, <https://armedforcesports.defense.gov/Media/Images/igphoto/2000713142/> Photo by: Ms Debra Ponzio

②基地が閉鎖されてまもなく、肺炎に似た「電子タバコ病」が広がったことである。ほんとうに電子タバコが原因なのか。

③同じ頃、米国ではH1N1インフルエンザが流行し始めた。

④そして10月には、米国政府機関等多くの組織で、“Event 201”と名付けられた「グローバルな対流行病」演習が行われている(後述)。

武漢における世界軍人五輪は、米国における上記のような「二つの出来事」後に開かれたという先後関係である。

そして米国における二つの出来事後、武漢で2019年12月初め、いわゆる「新型コロナウイルス」による「新型肺炎」患者が現れた。中国におけるコロナ騒動は、2020年2月中旬をヤマ場として国内では鎮静化に向かうが、ウイルスは国境を越えてまずヨーロッパ諸国を襲い、ついで米国に迫り、パンデミックになっ

図3 米軍生物兵器研究拠点=フォート・デトリック



(写真出所) CoBases - US Military Bases, <https://www.cobases.com/maryland/fort-detrick-mrmc/>
 「フォート・デトリック (英 Fort Detrick) とは、アメリカ合衆国・メリーランド州フレデリックある、アメリカ陸軍の医学研究施設である。アメリカ軍における生物兵器の使用や防護に関する研究の中心拠点となっている。」「フォート・デトリックでは過去に4名の研究者が感染事故によって死亡しており、そのうち3名の名を冠した通りがある。2001年に発生したアメリカ炭疽菌事件の犯行に使用された炭疽菌株は、当施設で保管されていたものだったとされている。犯行は当時炭疽菌ワクチン開発チームのリーダーだったブルース・イビンスによるものとされ、訴追される前に自殺して事件は終結した。事件の捜査の過程で重要参考人としてスティーブン・ハットフィル (英語版) が名指しされ、後に不当に犯人扱いされたとして司法省を相手に訴訟を起こし勝利した。しかし、アメリカの Seed 誌とイギリスのオブザーバー誌の合同調査によって、高レベルのセキュリティクリアランスを持つハットフィルの履歴書に多くの虚偽が含まれていることが発覚し、フォート・デトリックの採用選考の杜撰さが明らかになった。」(出典:フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia) より)

た。

(4) 米「細菌戦研究の拠点」からの漏洩・拡散説

生物化学戦研究をしているメリーランド州、フォート・デトリック基地 (旧名 キャンプ・デトリック) は、アメリカ軍初の文献ならびに実験をもちいた「細菌戦研究の拠点」である。旧日本軍 731 部隊の石井四郎隊長を始め多くの関係者が、アメリカに人体実験等の研究データを引き渡すことを引き換えに免責となった。そのデータがフォート・デトリックに引き渡された史実は比較的良好に知られている。2001年9.11テロ事件後に「炭疽菌」を使ったテロが行われたが、その炭疽菌は、フォート・デトリックから流出したものであることが確認されている。

2019年7月、この基地は「突如閉鎖」されたが、およそ半年後に、基地は再

開かれて今日に到る。一説によると、ハリケーンのために同基地の排水施設が損傷を受けて、浄化機能が失われた。その後、修復されて、基地機能を回復した。問題は排水施設の損傷による環境汚染の結果である。その詳細は報道されていないこともあり、その後の電子タバコ事件等から、米国内外では「ウイルス汚染水の流出」が危惧されていた。武漢五輪における米軍選手の不振および金銀潭医院への入院等の事実から、中国では、「ウイルスはこの基地の漏洩事故による拡散ではないか」、とする疑惑が広がる。しかしながら、繰り返すが、日本では軍人五輪の存在自体が知られていないし、またフォート・デトリック基地の一時閉鎖も報道は少ない。それゆえ中国人の間に、そしてこの軍人五輪に関わる参加国の間で広がる疑惑自体が理解できない。その結果、「中国は武漢ウイルスを発生させながら、その責任を米国に押しつけている」と一方的に信じ込む曲解が広範に流布している。これらの事実に尾ひれをつけた解釈は、SNSの世界で蔓延し、まさにインフォデミックである。インフォデミックの新語は、実際のパンデミックに先立ち、無責任なフェイクニュースがネット世界に氾濫し、それが世論を形成し始めた事実に対する専門家たちの憂慮が生んだ新語である。

4月24日の人民網日本語版は以下のように伝えたが、ほとんど読まれていない。

「国務院共同感染対策メカニズムの記者会見において、記者から『海外メディアの最近の報道によると、米軍はメリーランド州のフォート・デトリック基地にある生物化学兵器研究所を再稼働させ、情報を知った多くの住民が現地を離れ始めている。数多くの証拠から、昨年8月に緊急閉鎖された原因について不審な点が多い同研究所は、新型コロナウイルスの発生源で、米国で秋と冬のインフルエンザの大流行を引き起こし、その後ウイルスが武漢市で開かれた世界軍人運動会に参加した米国の軍人を通じ中国で変異し、再び大流行した可能性が疑われると米国で指摘する声が上がっている。この問題についてはどう考えているか』という質問があった」と。

(5) 何故、5名の兵士を専用機で帰国させたか？

以上の成り行きを受け、「米国はWHOに真相を説明せよ。なぜ5名の特殊な兵士だけを武漢五輪後に専用機で帰国させたのか!」というブログが発表された。以下はその要旨である。

「新型コロナウイルスが米国起源か否かは、実は簡単に検証できる。米国が特別機で武漢から送還した5名の軍人のウイルス型が、武漢で罹患した患者に特有なC型に属するか否かをWHOが調べれば、すぐ分かる! いま世界中で人々が疑問を感じている焦点は、以下の2点である。

① 2019年10月末、米国はなぜ大きな代価を払って専用機を用意し、[武漢世界軍人五輪に参加した]5名の罹患運動選手を武漢から送還したのか？

②米国チームの成績はきわめて不可解だ。射撃競技において金メダルはゼロ(中国隊は133コの金メダル)、順位は世界第35位であった。米国が派遣した369人の軍人選手は、射撃経験のない特殊な生物化学部隊ではなかったのか?最大の疑問は米国が5名の罹患選手を武漢から送還するに際して、「なぜ専用機を用いたか」である。当時、五輪は終わっていたのであるから、普通の疾病ならば2日待たせて、他の360名の軍人選手と一緒に帰国すればよいではないか。もう一ついえば、武漢国際空港で通常の民間航空機に搭乗すればよいではないか!

これらの軍人が軍人五輪後に「ウイルスを散布するに際して、不注意のために自らが罹患した生物化学部隊」ならば、発熱し重症になる前に米国に送還しなければならない。さもなければ「中国側がウイルスの持ち込みに気づく」結果となり、「米国の陰謀」は露顕してしまい、ここですべてが崩れる。中国側が直ちに武漢封鎖を決定し、米国は重大な政治的結果に直面する。それゆえ米国は速やかに専用機を派遣し彼らを送還したのではないか。

ブログは続けて書く。「一つは中国側が気づく前に、もう一つは360名の他の選手に感染させないために、専用機で送還した」、「罹患した5名の兵士のウイルスが武漢で罹患した患者と同じ「C家族のウイルス毒」かどうかを検査すべきである。遺憾ながらこの5名はすでに、この世から蒸発してしまった」。

ブログはこう煽るが、患者は死亡したとしても、そのウイルスサンプルは残されているはずで、検査すれば、そのゲノム配列は分かるはずだ。

(6) 中国はC型だけ、米国のはABCDE型勢揃い

郁文彬チームの研究によれば、新型コロナウイルスの系統樹は、ABCDEの5家族からなる。AB家族は第1世代であり、第2世代C家族は第1世代の子である。第3世代DE家族は第2世代C家族の子である。中国大陸の8万の感染者のウイルス株はすべてC家族であるのに対して、米国の感染者はABCDE型、すべて揃っている。繰り返すが、武漢C型は、AB型の子である。第1世代のAB型がなければ、どうして第2世代の子が生まれるであろうか? ブログはこのようにゲノム配列の系統樹をもとに、中国でブレイクアウトしたウイルス株は米国起源だと論じている。

次の論点は、例の生物基地のハリケーンによる汚染説である。

2019年8月に米国最大の生物化学兵器基地(Fort Detrick)が緊急閉鎖された。その後、米国で、いわゆるインフルエンザがブレイクアウトし、すでに1万余が病死した。10月下旬、武漢で世界軍人五輪が開かれ、米兵たちは武漢街角のいたるところをぶらついた。11月に武漢で新型コロナウイルス患者が現れ、全世界でブレイクアウトした。——この経過を見れば、ウイルス株がFort Detrick基地から流出したのは明らかではないか。

(7) 軍人五輪における仏、スペイン、伊への感染

武漢軍人五輪で新型コロナウイルスに感染したと主張するフランス女子10種競技の優勝者 Elodie Clouvel の証言を、フランス国際放送 rfi が5月6日に報道し、翌7日に英『ミラー』紙が詳報した。これらの報道を受けて、5月7日 AFP 電が、1号患者について、次の解説記事を報じて注目された。

「フランスでは、2020年1月下旬にクラスター（感染者集団）が発見されたとしているが、抗ウイルス薬の専門誌 IJAA に発表された最新研究によると、その1か月前に、すでに同国に存在したことが示唆されている。仏パリにあるアビセンス病院（Avicenne Hospital）とジャン・バルディエ病院（Jean-Verdier Hospital）でインフルエンザに似た症状で集中治療を受けた患者14人から採取した検体のレトロスペクティブ（回帰分析）を行った結果、患者の1人が新型コロナウイルス陽性であることが明らかになった。この患者は仏国内に住む42歳の男性で、中国への渡航歴はなかった。男性が入院したのは12月27日だった。アビセンス病院感染症部門を統括するオリビエ・ブショー（Olivier Bouchaud）によると、新型コロナウイルスは初め「誰からもその存在を気付かれることなく」拡散する。そのため、より以前の感染の証拠が見つかる可能性ありと、ブショーは AFP に語った。

さらに軍人オリンピックでは、スペインの選手の中からも感染者が出ている。スペインの英字紙 Olive Press は5月8日、以下のように報じた。

「2019年10月に武漢五輪から帰国したスペイン選手は新型コロナウイルスの症状を示した。スペイン国防部によれば、1人として検査を受けなかった。スペイン選手団は約170名であった。ある選手は『エル・モンド』紙に「当局は喉の痛み、あるいはインフルエンザ扱いしてすでに治癒したと扱ったが、これはまずかった」と語った。

中国は WHO に12月31日になってようやく「原因不明ウイルスによる肺炎」（のち Covid-19 と判明）を通報したが、これは軍人五輪「閉幕65日後」であった。この週に、フランス選手の症状が出たあとで、スペイン選手団のリーダーは、参加した選手にパンデミックの症状の有無を尋ねた。

スペイン国防部は五輪参加者が症状を示していることを知らず、これからテストするのでは遅すぎることを知らない。スペイン選手団の宿舎はフランス宿舎の近くではなかった。他に、イタリアのフェンシング選手（Matteo Tagliariol）がコロナに罹患したのではないかという疑惑について、イタリアの『ゴスパニューズ』（Gospa News）は5月7日に以下のように報道した。

「武漢の軍人オリンピックの最中に、多くの選手にひどいインフルエンザが蔓延した」、「私たちは病気になり、彼はトレーニングを3日間休んだ。そして、軍医と話す、彼はわたしたちに『代表団のほとんどが病気になったので、あなたたちも感染した』と言った」、「彼ら2人の証言によって、急性呼吸器症候群が少

なくとも2カ月前には存在していたという仮説を裏付けられる」このように、軍人オリンピックに参加した多くの選手に症状が見受けられるとする報道が続いた。これらの軍人五輪に関わる帰国後の選手の健康状態を踏まえて、中国側は軍人五輪における「米国の暗躍への疑問」を提起しているが、米国側は、この問題に何一つ答えていない。

3月11日、米国疾病予防管理センター（CDC）のレッドフィールド所長が下院公聴会で、「いわゆる流感による死者のなかには新型コロナウイルスによる死者が含まれる」事実を初めて認めた機会をとらえて、趙立堅副報道局長が、翌12日、米国側見解の矛盾を鋭く追及して「戦狼外交官」の異名を与えられた。この趙立堅発言を契機として中国側はトランプやポンペオ国務長官の攻勢に舌戦で応ずるようになった。

この論戦に接して、日本のメディアはNHK以下こぞってトランプ側の主張をあたかも真実であるかのごとく書き立てた。こうして空前の反中世論が形成されたのは、たぶん日中戦争以来の世論操作である。

（8） 21世紀の「超兵器」としての生物兵器

マイクロソフトの創設者であるビル・ゲイツの意図が忖度されるのは、たとえば、2017年2月に「生物兵器を用いた紛争が、核戦争よりも多くの人々を殺す可能性がある」と警告した往時を人々が記憶しているためだ。かつてアルカイダや「イスラム国IS」は、生物兵器開発に熱心だと伝えられ、また9.11以前から「生物兵器による攻撃のおそれ」を警告してきたジョセフ・リーバーマン上院議員は、大統領と議会に対し、バイオテロ対策を国家の優先事項とするよう呼びかけたりしている。

この文脈でしばしば想起されるのは、日本のオウム真理教が引き起こした、1995年の地下鉄サリン事件である。オウムは「最も洗練された生物化学兵器プログラム」を持っていたと国外では見られている。すなわち炭疽菌やほかの病原体を使った攻撃はうまく実行することはできなかったため、化学兵器に「切り替えられた」と解釈されている。

2001年末に米国で炭疽菌が封入された封筒が、政府などに届き始めた後、米連邦捜査局（FBI）は、米軍の微生物専門家ブルース・アイヴィンス研究員が犯人の可能性があると結論づけた。

兵器の発展史を顧みると、第1次世界大戦で化学兵器が生まれ、第2次世界大戦で核兵器が登場した。そしていま21世紀を象徴する「超兵器」は、生物兵器と見られている。この「兵器としての新型コロナウイルス」の性能を評価すると、これほど「致死率が低く、かつ感染力の強い」ウイルスは、兵器としては「最も効率が悪い最悪の兵器だ」という評価になる。

世界中のウイルス専門家たちが、たとえばランセット声明のようなアピール

を發して、新型コロナウイルスには人為的な「加工の痕跡」が見られないから、「自然変異による」ものであり、「生物兵器ではない」と論じたのは当然であろう。しかしながら、ウイルス株には「加工の痕跡あり、生物兵器に違いない」とするフェイクニュースは、SNSを通じて拡散され、インフォデミックを作り、世界、特に日本はその作られた恐怖心によって支配されている。

(9) 安倍首相・小池都知事のデタラメなコロナ対策

安倍首相・小池都知事流のコロナ対策は、「由らしむべし、知らしむべからず」の江戸時代の政治そのものだ。

①一滴の血で数分間に結果の判明する「抗体検査」を広範に行いまず感染者の「集積地」を探り当てる。

②次いで発見された「集積地」においては、「PCR検査」を行う。

③一連の作業により、潜在的感染者を特定し、治療を進めつつ、非感染者あるいは元感染者で抗体保有者、交叉免疫者軍団を組織し、経済活動を進める。

このような感染症対策の王道をまるで理解できずに、デタラメ行政を続けた。日本社会は確実に崩壊しつつある。テレワークが推奨されているが、現行の4G通信体制下では限界がある。普通の大学教師は、動画ビデオ厳禁等の通信容量制限に悩まされ、思い通りの講義はできない。にもかかわらず、5Gへの速やかな移行は、トランプに追隨する暗黒政権を進める華為技術排撃で妨げられ、韓国や中国との5G格差は日々開いている。(2020.7.10)

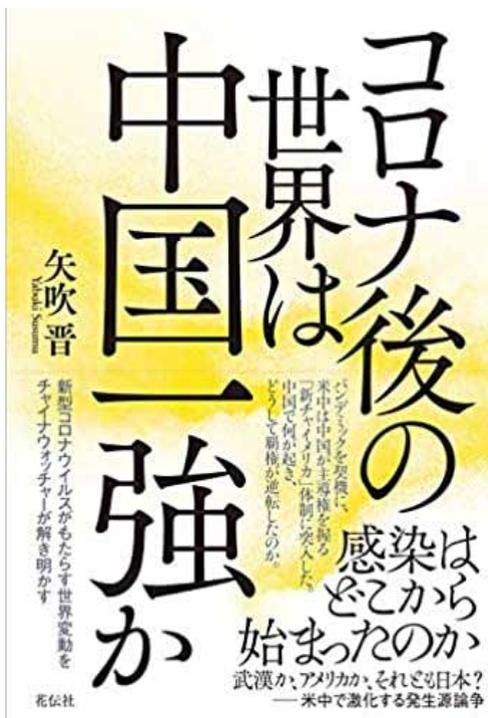
(1) 最近出た、元側近ボルトンの回想録 *The Room Where It Happened: A White House Memoir* は、この間の事情を率直に記述して話題になっている。

(2) 中国網日本語版(チャイナネット) 2019年10月18日。

(3) <http://j.people.com.cn/n3/2020/0424/c95952-9683699.html> (4) トランプのブログ、ツイッター作戦に対抗して、中国側も趙立堅副報道局長以後、ブログを多用するようになった。これは公式発言としてはいいにくい内容を含めて、逃げ口上を用意しながら行う宣伝戦には最良の武器らしい。要するに言いたいことはいうが、その発言に対する責任のとり方は曖昧なのだ。いいだけいい、あとであっさり取り消すやり方も、しばしば行われている。

(5) 中国側のブログはこう書いた。ここで5名の罹患選手の出現は他の情報に照らして確認できるが、この5名が「専用機を用いて送還されたか否か」については米中双方とも、事実を明らかにしていない。これは輸送機の発着という事実に関わるので、目に見えないウイルスの持ち込みとは異なり、調べるならば容易に判明する事実だが、それさえ米中はたがいに秘密を保持し合いつつ、派手な宣伝戦を展開している。

(6) *Coronavirus did not originate in Wuhan seafood market, Chinese scientists say Analysis of genomic data from 93 samples of the novel coronavirus suggests it was imported from elsewhere The busy market then boosted its circulation and spread it to the whole city, research shows He Huifeng*, 23 Feb, 2020.



コロナ後の世界は中国一強か
矢吹 晋著)
発行：花伝社
四六判 180 ページ
定価 1,500 円 + 税
ISBN9784763409355C コード C0036
発売 2020 年 7 月 27 日
<https://www.hanmoto.com/>

- (7) ただし、フランス国防相は軍人五輪で感染なしと否定している。
- (8) 5月7日 AFP 電。
- (9) <https://www.gospanews.net/en/2020/05/07/wuhangate-6-too-many-influenzas-cases-at-military-games-in-china-suspects-on-covid-19-by-italian-and-french-athletes/>
- (10) アイヴィンスは、2007 年予定されていた逮捕直前に自殺した。後に科学者たちは FBI の彼に対する証拠に疑念を投げかけた。
- (11) Statement in support of the scientists, public health professionals, and medical professionals of China combatting COVID-19. We are public health scientists who have closely followed the emergence of 2019 novel coronavirus disease (COVID-19) and are deeply concerned about its impact on global health and wellbeing. We have watched as the scientists, public health professionals, and medical professionals

of China, in particular, have worked diligently and effectively to rapidly identify the pathogen behind this outbreak, put in place significant measures to reduce its impact, and share their results transparently with the global health community. This effort has been remarkable. We sign this statement in solidarity with all scientists and health professionals in China who continue to save lives and protect global health during the challenge of the COVID-19 outbreak. We are all in this together, with our Chinese counterparts in the forefront, against this new viral threat. The rapid, open, and transparent sharing of data on this outbreak is now being threatened by rumours and misinformation around its origins. We stand together to strongly condemn conspiracy theories suggesting that COVID-19 does not have a natural origin. Scientists from multiple countries have published and analysed genomes of the causative agent, severe acute respiratory syndrome coronavirus 2 (SARS-CoV-2),¹ I. Gorbalenya AE, Baker SC, Baric RS, et al. Severe acute respiratory syndrome-related coronavirus: the species and its viruses—a statement of the Coronavirus Study Group. bioRxiv 2020; published online Feb 11. DOI:2020.02.07.937862 (preprint).

